

中國農村に於ける法意識の變革

——法慣習と土地改革の過程に於ける婦人——

町 田 是 正

一、この研究が華北農村慣行調査報告を主資料としながら「中國農村」の題を冠したのは、他に広く資料を求め引用したからである。

二、各項目に設けた註は、本文を補足するものである。極力註を参照せられたい。

目 次

- 一、まえがき——問題の提起——
- 二、旧中国農村の法慣習と婚姻法。
 - a、旧中国農村の法慣習と婚姻。
 - b、旧中国農村の法慣習と離婚。
- 三、新中国農村の法意識。
- a、土地改革と農民意識の變革。
 - b、土地改革と新婚姻法。
- 四、結語——まとめと今後の問題——

一、まえがき——問題の提起——

知られるように中国人の伝統的心理——それは規範意識の前近代性として、従来、道德的意識の外面性（面子）。閉

鎖性（縁故者贖負）。打算性。公私の無差別などが数えられ、また旧中国の支配的な意識は阿Q意識である①とされている。たしかにこれらの伝統的心理。阿Q意識は小規模農業と手工業を基盤とする旧中国の産物ではある。併しこれらを単に中国人の民族性として固定的に断定してはならない。抗日戦期を通して社会主義民族の形成をなしつつあつた解放地区——その根拠地の生活からは新しい集団意識が生まれ、こゝでは、これらの伝統的心理の人民への影響を、自由主義として批判をはじめ、その変革を求めていつた。③

解放後は、この阿Q意識をこえて、『五の愛——祖国を愛し、人民を愛し、労働を愛し、科学を愛し、公共の財物を愛す』④に示される新しい集団主義意識の形成がなされ、そこに社会主義意識の方向を示してきた。こゝにヨーロッパに民族意識がその資本主義的地盤の変遷に伴い、ブルジョア意識からファシズム意識に転化するのとは対照的である。

既に新聞等の報道機関が報ずる如く、⑤社会主義民族の形成を目指す中国労働同盟は、人民々主独裁による民衆の解放によつて、農民は土地改革法（一九五〇年六月三〇日）により、次々に生産合作社に組織され、労働者は労働組合法（一九五〇年六月三〇日）によつて、中華全国総工会に結集し、婦人は婚姻法（一九五〇年五月一日）により、儒教的な家族制度から民主婦女会に、私的資本家も国营企業の指導の下に、全国工商連合会に組織されて、公私公営企業を通じて次々に社会主義経営に接近している。このような新しい人間関係を規正する法は、旧中国数千年来の伝統的權威主義に基くものではなく、人民の中から生れ、その支持の下に発展するものでなければならない。

変革され、変革されつゝある新しい中国の諸制度を問題にするに就ても、単に制度の上での変革だけに止らず、政

治と法と裁判の担い手としての意識——この新しい中国人民の政治主体としての意識に立ち入らねば十全ということはない。
(倉石教授編『変革期 中国の研究』一二二頁) たしかに政治的主体としての人民の意識に立ち入る度合が深い程、このような意識の変革と関係のない単純なる制度の変革は、戦後の日本の諸制度の変革と照し合せても、一個のカリカチュアにすぎないのである。

だがこゝでは、中国に於ける政治意識。法意識乃至宗教意識。中国旧思想に対する変革運動の展開。政治組織の特質。土地改革の諸問題(土地均分。階級分析。家族制度) 経済構造の変革の夫々に就て述べることは許されない。差当新旧婚姻法と土地改革過程に於ける農民——殊に婦人の問題を取り上げよう。そしてこの研究が、従来、ともすれば儒教的制度と中国近來の現実生活の規範意識とが、往々食い違っていることから出發して解放以前の農村に、儒教的制度の崩壊を何かと想定することの、一つの警告ともなり、その実態を歴史的に検討把握するための示唆ともなればと、秘かに希うものである。^⑥

【註】

(1) 儒教倫理は現実の肯定の上に立つて、その目標は外面上の礼儀や作法における尊嚴。即ち面子 *Gesicht* の維持に向けられ、外面顧慮だけに終つて内面性の獲得がない。(マックス・ウェバー宗教社会学 *Religionssoziologie*) このような倫理の外面性・モラルの内外分裂は儒教ばかりではなく旧來の中国の道德意識一般の問題である。このような道德の粹への順応は又極端なネボチズムを育てる。論語の開卷第一にいう遠方から來た友(朋友)との楽しみも同じ師匠の弟子仲間のことであることは、二千年も前から学者が述べている。およそ粹を通じてなれば自己の利益の伸張はおろか、自己の生命身体財産が十分に守られない社会——その粹の不便さがわかる位までに経済的發展もなく、近代意識も形成されない社会では、狭い人間結合による関係はいつまでも存続するのである。(仁井田教授「中国法制史」三二—四一頁に詳細な解説がある)

(2) 阿Qは後退的社会——東洋的家父長權威と家内奴隸的家族の社会の生み出した後退の人間のシンボルとして、人間の解放を妨げる意識内部のガンとして、その克服の目標として今日では評価されている。

(3) こゝで自由主義とは、ヨーロッパの封建制と戦つた自由主義とはその客観的意義と概念を異にし、むしろ中国の前近代的規範意識を示すものである。毛沢東によれば旧中国における自由主義のタイプには十一種あると云う。彼は自由主義の根源は個人の利益を第一におき、革命の利益を第二におく、ブルジョアの利己心であり、そこから思想上、政治上、組織上の自由主義が生れるのである。それ故にこそ、新しい中国社会建設には、ザンゲや回心とは異なり、たゞ思想觀念の切りかえではなく現実の新しい社会に自己の心身をおくことを大切である。(毛沢東選集第三卷「自由主義に反対する」邦訳八九―九三頁参照)

(4) 中華人民共和國政治協商會議共同綱領第四二條「提倡愛祖国、愛人民、愛労働、愛科学、愛護公共財物中華人民共和國全体国民的公德」(Article 42. Love of the fatherland, Love of the people, Love of labour, Love of science and care of public property shall be promoted as the public spirit of the people's Republic of China.) の五(五)の「愛の徳目」は新中国の目標とする新しい倫理であつて、それは中国人の新しい精神を支える新しい人間の行動法則である。従つてその徳目は五つと云いながら従前の儒教道德の五倫(父子・君臣・夫婦・長幼・朋友)の間の人倫(五常(父母・兄弟・及び子としての徳目・又は仁義・礼・智・信)とは全く質的に違つたものである。

(5) こゝでは朝日新聞の学芸欄・世界情勢欄に報道されたものうち、二三ひろい題名と年月日を掲示してみよう。——「中共経済建設の現状」(27・12・16)「中共第一次五ヶ年計画」(28・7・15)「中共の治水対策」(28・8・4)「中共の農業建設」(28・2・20)「赤い中国生れて四周年」(28・9・30)「農業共同化の問題——中国の第二次革命」(30・9)「中共の合作社の実態」(30・6・18)「新中国の婦人」(30・1・7)「中国の農業共同化の試み」(31・7・23)「中共の近ごろ」(30・6・17)「新中国の印象——ベヴァン氏特別寄稿」等々。

(6) 仁井田教授は「華北農村に於ける家族分裂の実態」(東洋文化研究第四号昭和廿二年六月号)の中で、儒教的制度の崩壊を何かと想定する危険性に就て、崩壊以前の儒教的制度の現実性。その実態を歴史的に検討すべきことを旧来の法定的離婚原因七出を対象にして述べられ、その思想的支柱は儒教的士大夫的、即ち官人的地主的離婚規範であつたが、その七出の構成と内容とは、官僚や地主の間にあつてさえ、もともとそれほど積極的に支持したのではなかつた。従つて現実の農村社会において農民からの支持がないからとて敢て驚くには当たらないのであつて、儒教的制度の崩壊がその支持のない点

に見出されるときたり、殊に農民支持のない点に関連させて問題を論定する場合に如何にしばしば危険性が伴うかをよく理解せねばならない。

二、旧中國農村の法慣習と婚姻法

法的慣行——所謂それは生きた法律に相当するものであるから、元來固定不動の形に於て存在するものではなく、生活と共に流動的に生きているものである。伝統的にして、従つて固定的傾向をもつた在來の秩序と、日に日に生成發展して已まない新しい社会形成力との接觸面に、不連續線的渦流の形で發生し動きつゝあるものこそ、法的慣行存在の真相に外ならないのである。死滅しつゝある法的慣行、起生しつゝある法的慣行、それらをその動きつゝある方面に留意しながら画き出すことが、吾々にとつて最も重要な任務であると言わねばならない。^①

A・旧中國農村の法慣習と婚姻。

農村の家族生活にあつて家族の秩序を支えているのは、家父長的權威 *Patriarcalitas* ^②である。その家父長的權威と家族の從屬關係——つまり身分的法律關係は、家長と家族。父と子。娘。養子。婿。嫁。乃至は夫婦などの多分に勞働力の繼續的把握、又はその支配をねらつて規律だてられてきた諸關係である。この家族が家族勞働の現在又は將來の要員たる限り、父乃至家長は勞働力維持の必要から、即ち家族勞働の配慮の上から家族の身分變更に就て、強い發言權と最後の決定權が認められてきた。^③

仁井田教授の『中國の農村家族』（三二頁以下）には、從前の農民の答に従えば、父母は任意に子女の爲に婚約し

て、祖父―直系尊属がいれば祖父たる家長が父を抑えて孫の身分的処置をきめかねないし、より寵の神や祖先(位牌)や占師に意見を問うことはあつても、当の子女に意見を問うとは限らない。娘達は結婚に就て父母の意見に従い、婚約後に不平や希望を口にすることがあつても、父母はこれを『天作之合』(天命)として、あきらめさせると云うのである。父母は同様に男にもその意見を求めることはない。若者は『不服はあるが仕方がない』とあきらめ(内田智雄氏調査)或は自由結婚を否定して『自由結婚は無用だ。そんなことをすると殴られる』と河北省樂城県寺北柴村の一農民は云つてゐる。^⑤従つて男女は婚姻の主体であるよりはむしろ客体である。そしてこのような農村の地盤がそのまゝであつた限り、男女の結婚は、男女双方の婚姻の自由自発の上に築くと云う。中華民法―第九七二条などは全く実現の可能性がなかつたのである。

このような家族構成員の客体としての婚姻は、更に家族労働者としての性格を強く打出している。山東省歷城県の或る農民に『五つも違ふ嫁を十三の男の子に貰つたのは何のためか』と聞けば『こういう女を必要としたから、手伝つて貰うによいから』と答え(早川氏調査)或は『炊事のため、裁縫のため、農地の耕作のためである』とか、『手が足りないので、もし嫁を貰わなければ短工(雇人)を頼まねばならぬ』それは『短工を雇うよりも安くつく』とも答えてゐる。^⑦このような幼い夫が年をとつた妻をもたされる奶婚―奶媳(一〇才未満の男と二〇才前後)の女とが結婚させられるもの^⑧も亦、華北農村に於ける一般的なものである。

従つて既に見た如く、中華民國法の上で婚約は男は満一七歳以上、女は満一五歳以上(第九七三條)結婚は男は満一八歳以上、女は満一六歳以上(第九八〇條)の規定などは、これまでの農村ではその実現の可能性は極めて乏しかつた。従前の農民がいう『自由結婚は無用だ、そんなことをすると殴られる』に示される慣行に従えば、男女の結婚

は、男女双方の婚姻の自由自発の上に築くという規定が、中華民國民法にうたわれているとしても、それは、そのまゝでは全く実施と実現の可能性はなかつたと云えるのである。

【註】

(1) 末広博士「法律と慣習」(法律時報昭和十八年二月第一五卷二二頁)でも既に指摘されているが、因に中国農村慣行調査一卷の末広博士の調査方針に関する論文には「社会学者の社会調査に於けるが如く單に社会関係の構成形式を究明するを以て満足することなく、寧ろ社会関係を規律し成り立たしめている法的慣行、即ち法的規範を明かにするに依つて其実質的組織と動的機構とを明かにすることに力めねばならぬ」(一八頁)とあつて、末広蔵太郎博士の指導下に行われた華北農村のあらゆる生活規範を法社会学的方法によつて調査するにあたつて、如何なる点に留意すべきか、その慣行の把え方の重要性について示唆している。

(2) 清水盛光教授「家族」(岩波全書)第三章第二節に家長の地位と職能に就て従前の研究成果を整理して詳述されている。仁井田教授「中国法制史」第十三章第二節には華北農村慣行調査に基いて、博士永年の研究成果を極めてユニークに述べている。従前云われてきた如く、家長権威が絶対的権威をもつものではないにしても、それを無視することは出来ない。家長に過失があつて、尙その上に家長権を振り回す時に制限されるに止るのである。

(3) 河北省順義県沙井村に於ての応答に「弟が分家するとき戸長の承諾いるや——兄(家長)の許可を貰う。兄が承諾しなければ出来ない」(本田氏調査一卷二二九頁)「娘が嫁に行くとき戸長の許可を要するか——戸長が反対したときは出来ない」(本田氏調査二卷二三〇頁)とあり、殊に「族長、家長の仕事で最も重要とされるものが墓地と婚姻の打合と決定」(一卷二三〇・三三五頁)にあつて見れば、家長権威も理解されよう。他に樂城縣寺北柴村「家族篇」調査資料参照されたい。

(4) 法諺に「嫁鶏随鶏嫁狗随狗(夫がどんなものであると嫁に行つた以上は運命と諦めて夫に随わねばならぬ)」——華日大辞典——旺文社二九五頁

(5) 華北農村慣行調査第三卷「家族篇」安藤・佐野両氏調査

(6) 中華民國民事実体法(民国一九年二月二六日公布)親屬法第二章第一節婚約九七二条「婚約必由男女当事人自行訂定」(中華民國六法全書一八三頁)

(7) 河北省樂城縣寺北柴村の農民郝小紅、郝狗妮との応答に「結婚の目的は何か——家の人数が少いから、妻をもらえば助か

る」。「家の後嗣をつくるという意味ではないか——あるが少い。家庭の手伝いのため」(内田智雄氏調査三卷一四七)他に順義県沙井村(本田悦郎氏調査一巻二七九頁以下) 鑾城県寺北柴村(佐野・安藤両氏調査三卷七四頁以下) 参照。

(8) 毛沢東の江西省「興国県の調査」(邦訳選集一巻)にも一〇歳未満の奶婚が報告されている。拙著「解放前夜に於ける中国農村の生活」(身延山短大学報第二九号一〇六頁別表参照)

(9) 前掲民国法第九七三条「男未滿一七歳女未滿一五歳者不得訂定婚約」第九七四条「婚約不得請求強迫履行」第九八〇條「男未滿一八歳女子未滿一六歳者不得結婚」と規定され、因に中共では婚姻は当人以外の何人の同意も要せず、婚姻適齢は男は二〇歳、女は一八歳に引き上げられている。

B・旧中国農村の法慣習と離婚

先に瞥見した如く、旧来女性には婚姻の自由がなかつたばかりでなく、婚姻生活の上で男性と対等の地位に立つことができなかった。河南省魯山県地方などの諺に『夫は(妻の) 頭上の一層の天』というのがあるが、そもこの諺の出典は紀元前数世紀も前の儒教の經典、例えば『儀礼』に云う『夫は妻の天』にあるが、それはある特定地方だけの諺ではない。若し毛沢東『湖南農民運動の視察報告』(一九二九年)には、中国社会の支配権力には四つあり、(一)は国家権力、(二)は家父長権力、(三)は冥界を支配する神権である。そして女子の場合には、夫権を加えて四つの権力に服することになるという。妻は夫の私的制裁に服し、姦通の場合などは夫は妻を殺すも殺さぬもその任意であつて、殺した場合も罪とはならなかつた。夫は妻を殴る方が世間体がよく、ひどく殴らなければ世間の物笑いになり、世間体が悪かつた。『娶つた妻、買つた馬は自分で乗ろうが打とうがかつてだ』(仁井田教授『中国の農村家族』一一三頁)の諺は如実にこれを表わしている。

併し所謂解放以前までは、このように殴られても女は離婚するすべがなかつた。勿論法規の上では離婚権は明規さ^③

れているに拘らず、旧律（唐律など）や慣習の上でも女は一方的意志で離婚することは許されなかつた。このようなところに離婚権の自由が認められるはづがなく、旧來の法慣行の上では、夫のみが離婚権を有し、一方的意志で妻の逐出が許されたのである。併しながら、このような見方が妥当の如くであるに拘らず、農村では夫の離婚権がそのまゝ容認され、又夫権が強制施行されることは極めて稀であつた。以下これに就て詳述してみよう。

華北農村での調査によれば、夫に離婚の専権があるにも拘らず妻は容易に逐出されはしなかつた。併しそれがために家父長乃至は夫の權威の崩壊と見るならば大間違であつて、例えば、従前、七つの離婚原因や妻の大いなる過失とも思われないものまでも、その有無に拘らず妻を逐出し得ると見たのは誤りであつて、『太太の方から離婚を主張できる場合があるか』と聞けば『ない』と答え（早川保氏調査）妻の地位は極めて低く、農村に於て夫側の専権的離婚権を利用して婚姻解消が出来たと見るのが、従前から云われた如く妥当の様であるのが、それは皮相的な間違つた見方であつたと云えよう。

たしかに生活に余裕のある官吏や地主などの場合には、妾を娶ることも離婚も容易にできたろうが、農民の場合には、経済的に云つて妾をもてる余裕もある筈がなく、逆に妻を逐出したらその場から生活に困つてしまふし、他面、将来農業経営の支柱となるべき子が得られないのである。殊に折角金を掛けて娶つたものを逐出しては、また金をかけて娶る余裕がないし、打算してみると極めて割が悪いことになる。

斯ように農民の間では離婚はあまり行われないし、また家父長権はそれを強く左右している。のみならず離婚の切掛に最もなり易い姦通でさえも、これに目を覆い、夫は時にはことさらに口を噤み見逃し勝ちである。河北省歷城県冷水溝莊での調査に『妻が姦通することはないか』ある。『その時は離婚しないか』知らなかつたら出来ぬ。知つ

ていても貧乏で他に妻を求め得ないので知らぬ顔をしていることがある。金持であれば離婚する』(杉之原舜一・内田智雄氏調査)^⑩と報告されている。夫は姦夫姦婦をその現場でならば殺害しても罪にならないのは(水滸伝に類例がある)旧来の法律でも慣習でも認められている。併しそうした私刑主義も経済的条件によつていきおい制限されるのであつて、経済的条件(道德の外面性も一つの条件ではあるが)が妻に離婚からの保護を与える結果をもたらしているだけであり、妾を持てる筈のない農民は、又同じ理由から妻の離婚も容易に出来ないと思ふのである。

斯る旧農村に於ける離婚慣習は、中華民國民法(第一〇四九條以下)の離婚制に大きな限界を与え、こうした民法上の離婚制が、農村社会の法慣習の上に優位を占めていたとは、考えられないのであつて、こゝに私は、農村慣行の実態が新しい規範意識に展開される要因は何か、この問題を次項で取上げて、国家の法律が現実的効力を發揮し得るのは如何なる基盤が必要か、以下論究しようと思ふ。

【註】

- (1) 儀礼喪服伝「父者子之天、夫者妻之天」春秋左氏伝桓公一五年「雍姬知之、謂其母曰、父与夫孰親、其母曰、人盡夫也、父一而已、胡可比也(杜氏註、婦人在室則天父、出則夫天。女以為疑、故母以所生為本解之)」温公家範「夫天也、妻地也夫日也、妻月也」(仁井田教授「支那身分法史」六五二頁以下)又礼記(郊特牲)の三從——婦人は人に従うもの、幼にして父母に従い、嫁して夫に従い、夫死しては子に従う。の古典的な婦女の永久後見思想、制度、意識の家族倫理は農民の法主体についてどの程度の意識をもたしているか。こうした封建的以前の雰囲気こそ今日では打崩さるべきである。
- (2) 湖南農民運動考察報告「中国の男子はふつう三つの種類の系統的な権力の支配をうけていた。それは(1) 国、省、県、村にいたる国家系統(政権) (2) 宗祠、支祠から家長にいたるまでの家族系統(族権) (3) 閭閻大王から城鎮の守護神にいたるまでの陰界系統及び玉皇上帝から各種の妖怪にいたるまでの神仙系統——これを総称した鬼神系統(神権)である。(4) 婦人は以上のべた三つの種類の権力の支配をうけているばかりでなく、そのうえに男子からの支配(夫権)をうけた。この四つの種類の権力——政権、族権、神権、夫権は封建的、宗法的思想と制度の全部を代表するものであり

中国の人民とくに農民をがんじがらめにしばっている四本の綱である」(邦訳選集第一卷所収。原典は一九五一年一〇月北京新華書店第一版が国会図書館中国資料部に蔵さる)

(3) 古くは唐律疏議宋刑統卷十四戸婚律義絶離之条及び疏には「若夫妻不相安諧而和離者不坐。疏議曰……若夫妻不相安諧、謂彼此情不相得、而願離者不坐」と夫婦不和の場合に「和離」(合意離婚)が許されているし、又中華民國民法第五節一〇四九條「夫妻而願離婚者得自行離婚」第一〇五〇条「而願離婚應以書面爲之並應有二人以上証人之簽」第一〇五一条「而願離婚後關於子之監護由夫任之但另有約定者從其約定」と規定されている。

(4) 「逐出」の言葉を用いるのは、中国で離婚を棄。出。去。と云い、儀礼喪服註には「出猶去也」とあり、或は放。放出。

斥去・逐・遣・点遣・遺斥・離・離棄・離異・牝離と称したことが、旧唐書、唐令、唐律、清明集等の諸史料に見えるからである。

(5) 中世キリスト教の婚姻解消主義は男性側の一方的自由を制約する作用をもっていたが、「然らばはや二人にはあらず一体なり、神の合せ給ひし者は人これを離すべからず」(So that they are no more twain, but one flesh what therefore Got both joined together, let not man put asunder. Chapter XIX. mathew) との山上垂訓もこの意味であろうが、これとても教会権をもつてしてもその実質的貫徹は容易ではなかつたのである。こゝでは洋の東西を眺める一つの参考までに註に入れておく。

(6) 婦有七出三不去七出者——(不順父母出・無子出・淫僻出・惡疾出・妬疾出・多口舌出・窃盗出) 不順父母出者(謂其逆德也) 無子者(謂其絶世也) 淫僻者(謂其乱族也) 嫉妬者(謂其乱家也) 惡疾者(謂其不可供案盛也) 多口舌者(謂其離親也) 窃盗者(謂其反義也)——孔子家語卷六本解(唐宋法律文書の研究四八八頁)

(7) 後漢書二九鮑永伝「永少有志操習歐陽尚書、事後母至孝、妻嘗於母前叱狗、而永即去之」とあつて、「叱狗」とは「不敬」の意味にとつてこれを離別するもので、これこそ礼記の「父母不悦」が中心問題で儒教倫理をよく現わしている伝統的規範であつた。

(8) 河北省樂城縣寺北柴村での応答に「村ではどういう時に離婚してよいとなつてゐるか——姦淫、夫婦感情惡劣」「嫁が舅姑に仕えず不孝な時は如何——少々程度では離婚の理由にならない」「子を生まない時は——離婚の理由にならない」「偷盗をした時はどうか——後悔して自覺すれば離婚の理由にならない」「夫が妻を養わない時は如何——理由にならない。こういう言葉がある。嫁漢嫁漢爲の穿衣吃飯。娶妻娶妻爲の揆餓受飢。少々生活に困るからといつて離婚の理由にならない」「夫が金を十分もつてゐるに拘らず、賭博にふけり女に金を使つて妻を養わない時は如何——やはり妻の方か

ら離婚をいいたすことは出来ない」(早川保調査員と張仲寅・劉玉徳との応答——慣行調査三卷一二五—二六頁)

(9) 離婚と家長権の關係について、内田智雄氏が河北省順義縣城内及び沙井村での調査。同じく樂城縣寺北柴村での安藤鎮正・佐野利一兩氏と張樂郷との応答によれば「他家へ嫁に行くか、過繼した後、離婚して帰る時は実家の家長の同意を要するか——家長が同意せねば帰ることはできない。婚家の家長が同意せねば離婚できない」「婚家で返すといい、実家の家長が同意しない時は帰せるか——追い出された時は離婚とはいわない。実家の家長が理由を聞いて適当でない時は送り返す夫の方は必ず引きとる」「離婚両家情願可以」「子が望まず家長が望む場合は——父子とか夫婦とかは五倫の一つであるから、習慣によると顔が悪くても夫が離婚したくても離婚できない」(慣行調査三卷七四—八三頁)

(10) 費孝通氏「江村經濟」Hsiao-tungfei, Peasant life in China, 1939 P47 (市木亮氏訳六二頁)で「夫は理論上は姦夫姦婦を殺し得ることになっている。然し実際には滅多にそんな事をしない。結婚の失費は品行な妻を離婚することさえ阻む」と華中太湖南部での調査で述べているが、同様な現象は華北でも見られるのである。

(11) 法諺に「養漢要雙」(夫は現場でならば二つに重ねて四つに切つても)私刑は認められ、又「捉姦捉雙、捉賊捉贓」(不義者を捉えるには男女双方を捉えよ。盗人を捉えるには盗難品をも一緒に捉えよ)(華日大辭典—旺文社)も同じ法諺である。

(12) 河北省樂城縣寺北柴村で安藤鎮正氏と張樂郷氏との応答に「民国になつてから新しい民国の法律は行われたか——やはり旧慣を尊重している。新しい法律は余り行われぬ」「民国の法律が出来て困つたことはなかつたか——困つたことはないが自由結婚や父子平等は無用だ」「自由結婚はないというが親が決めるのか——そうです『父母の命』『媒約の言』によつて決まる」「最近若いものが自分で嫁を選ぶことはないか——ない、そんなことをすると嘲られる。孔子と孟子の決めた三綱(君臣父子夫婦)五常(仁・義・礼・智・信)によるのだ」とある如く、農民意識は、新民法が近代法なみに物權法定主義を制定されたというだけでは、そう簡単には慣習的規範と置きかえられない。一応近代的な中華民國法も法と云えるかどうか疑問ならざるを得ないのであつて、応答に見られる如く多分に儒教的制度と農民の慣行規範意識は無關係ではないのである。

二・新中国農村の法意識

中国社会の新しい課題は、客体的条件の变革と同時に、主体的条件の变革——つまり意識の变革の実態化でなければ

ならない。中国古来の諺に『三人の中人は一官に当る』（三個中人当一官）とか『三人の馬鹿も一人の物識りに当り、三人の物識りは一人の県知事に当る』（三個愚人当明人。三個明人当知県）とか『三人の賤しい靴工は孔明にまさる』（三個臭皮匠、勝如諸葛亮）というのがある。そして近來に於ても、『五里風を異にし、十里俗を改む』（河北）とか『郷に走つては郷に随い』（河北・河南）『三里俗を同じくせず、五里規矩を改む』（河南）の法諺が、それ／＼の地方地域の表現にニュアンスを示しながらも、それを成り立たせていたのは共通の社会基底であつた。ところが、こういう等質的な社会も変革されるれば諺も変り、新中国では『三人の農民は一官に当る』（三個農夫当一官）とか『三人の靴工は一官に当る』といわれるようになった。この新しい諺は、かつて政治や法律や裁判を恐れ敬遠していた農民や職工が、今や自ら政治や裁判の担手という意識の成長を物語るものである。

A・土地改革と農民意識の変革

中国の土地改革の研究は、既に若干の論著が發表されている。こゝでは違つた角度から眺め農民の意識にピントを合せたい。^①

土地改革―農地制度の改革は何れの国に於ても、土地所有の不均等をば土地所有制度の変革を通して、是正しようとするものである。しかし、元來土地制度は歴史的に形成されたものであり、農業が一国の主要産業である場合には、特に政治権力と密接に結びついている。従つて土地改革は、單に経済的現象としてのみ把握することは許されない。それには政治権力との斗争を伴いこれなくしては遂行は不可能である。

中国革命は遠い過去から農民の土地をめぐる抗争によつて特徴づけられている。^②とくに太平天国農民戦争が、土地均分綱領（天朝田畝制度）を掲げこれに手をつけて以來、孫文らの中国革命同盟会の土地国有乃至平均地権の綱領

を経て、孫文晩年の『耕者要有其田』の土地改革綱領にいたるまで、反封建革命の中心内容とされてきたのである。そして彼の農業革命の思想は、中国共産党の毛沢東に受継がれ、所謂大革命時期の農民の未曾有の蜂起とその失敗を経て、ソヴェト時期の土地革命段階にもちこまれた。この間に於ける農民の革命的エネルギーの發揮は、地主及び高利貸から解放によつて、いかに農民が政治的に高度な意識をもつたかを、如実に語るものである。^③

当時の農民の多くは、自然生活的な自主的な階級意識によつてこれを行つたのであり、この農民の土地に対する欲求は、^④ついに中国共産党をして、自己の土地改革を容認せしめ得たのである。従つて一九四六年中共指導部は『五四指示』という形で、土地の分配を指示し、その後、中共は正式に『中国土地法大綱』^⑤による土地改革へ、更に『中華人民土地改革法』^⑥の土地改革へと發展をとげ、今日に至つたのである。

併しながら封建的土地所有の徹底的粉碎は、一片の法令の發布によつて『封建的搾取制度の一切を、一夜にして絶滅しよう』と試みてはならない（一九四八年四月一日晋綏幹部會議に於ける毛沢東の講話）し、又成し遂げられるものではない。それは農民の自發性を基調とする執拗な革命的情熱と斗いにかゝつてゐる。土地改革の全過程は、旧来の農村社会の構造と秩序と斗いながら、新しい土地所有制度と、これに即応する新しい社会秩序を形成して行く過程なのである。この新しい社会秩序の形成は住民をば、地主。富農。中農。労働者という階級構成の区分をなし、^⑦土地の沒收と分配を中心に行われたのである。

農民の自發性は土地改革の論理的帰結が、現實に眼のあたりに実証されることによつて、土地改革の恩恵に浴した農民達が、それを確保し防衛するという物質的意慾に転化され、自分達の人民政府を脅かす敵に対しては、斗争意識に成長し、例えば朝鮮事変に於ける抗米援朝運動への積極的な支持は、この如実な現れであらう。こゝに人民政府の

政策は、農民自身の利害と完全に一致して、かつて部分的に或は不十分にしか存在しなかつた愛国心は、今や祖国愛として全国的規模に発展したのである。こうして自己を基調とする意識と関連して注目すべきは、土地改革の合法的執行機関が、郷村農民大会。農民代表会議。選出委員会。区県各級人民代表大会。農民組合委員会により行われることである。この農民代表会議は最下層の人民代表会議に発展し、これを土台として中央人民政府委員会（主席毛沢東）。全国人民代表大会の人民政権が存在するのであつて、人民政府は末端の農民個々人と民主的に結びついている。斯ようにして国家は、始めて人民自らの国家として意識され、農民の間に祖国愛という国家的意識が生れたのである。^⑧

土地改革は機械的、劃一的ではなく、総ゆる工作が現実に即して変革される中にこそ、農民の自発性は十分に発揮されるのである。長きにわたり封建的土地所有の重圧におしひしがれていた農民が、その従属意識から解放され、階級斗争の自由を得たという、この農民意識の変革との關係に於て土地改革も理解されねばならない。^⑨そして土地改革の過程を通して農民が、政治的にも主体であると意識することこそ、新中国の建設途上に於て、最も要請される課題と問題である。

【註】

(1) こゝで違つた角度から見るとは、中国の新民主主義經濟と農業の社會主義的改造に於けるウクライドを取り上げ發展過程の統計數字を示すを目的とするものではなく、農民意識に主点を置くからである。因に統計による研究は倉石教授編「變革期中国の研究」第八章今堀誠二比「中国に於ける經濟構造の變革とその課題」アジア政治学会編「中国政治經濟總監」第六。第七編参照されたし。

(2) 農民蜂起に就て毛沢東は「中国革命和中国共产党」の中で「封建社會の主要な矛盾は農民階級と地主階級の矛盾である。地

主階級の農民に対する残酷な経済的搾取と政治的圧迫によつて農民は幾度となく蜂起を行い、中国の歴史を推し進めてきた真の原動力として農民暴動と農民戦争がある。秦朝の陳勝。吳広。項羽。劉邦。漢朝の新市。平林。赤眉。黃巾。銅馬。隋朝の李密。竇建德。唐朝の黃巢。宋朝の方臘。元朝の朱元璋。明朝の李自成。清朝の太平天国と数百年を下らない。農民の反抗運動は当時の専制支配に打撃を与え多少とも社会の生産關係を変化させ、多少とも社会の生産力を推し進めた」(邦訳選集第三卷所収)

(3) 毛沢東「湖南農民運動の視察報告」。「毛沢東選集学習參考資料一巻」(三一書房)。その他農村調査報告を参照。

(4) 一九四六年五月四日に指示され地主の余剰土地の有償買取と土地のない又は少い農民に対する平均分配を目的とした。「五四指示」に基き公布された「山東省土地改革弁法」第八條に「農民に対する賠償債務の履行、または土地の自発的献納を行つたのち」第一七條「沒收地、献納地、補償をうけて強制収用された土地、並びに再分配さるべき公有地を、土地のない農民または少ない農民に分配する」と規定し土地に餓えた農民が家族人員に応じて土地の分配をうけ、自立するに足るだけの土地を入手し得るに至つた。

(5) 「中国土地法大綱」は一九四七年一〇月一〇日公布され、中共中央の「中国土地法大綱發表に關する決議」と共に重要なものである。「封建的および半封建的搾取の土地制度を廢止し『耕者有其田』の土地制度を実施する」(第一条)「あらゆる地主の土地所有權を廢止」(第二条)「地主の家畜、農具、家屋、食糧およびその他の財産を接収」(第八条)と規定し半封建的土地所有をその物質的基礎とする半封建的搾取の可能性を徹底的に階級としての地主を廢絶せしめるものである。

(6) 一九五〇年六月三〇日公布の「中華人民共和國土地改革法」は「中国土地法大綱」と関連して「地主階級の封建的搾取の土地所有制を廢除して農民の土地所有制を實行してそれによつて農村生産力を解放」(第一条)「分割地的土地所有一独立自營農民を創出し」(第二八条)この大事業の合法的執行機關には「鄉村農民大会、農民代表大会およびその選出した農民組合委員会」(第二九条)が当るのであつて、その指導は上からなされるが、中国の土地改革が貧農・中農の自発性を基調とした大衆運動として実施されたことが理解される。

(7) 基本的な分析としては、毛沢東「怎樣分析農村階級」(邦訳選集第一卷所収)を参照されたい。拙著「解放前夜の中国農村社会構造」(身延山短大学報廿九号九七頁以下)同「中国共産党史研究」階級分析の項参照。

(8) 土地改革の過程に於て農民の政治意識に就ては下記の談話が最もよい資料を提供している。「もう一つの大きな変化は租

税（愛国公糧）を本当によるこんで納めるようになったことです。自分達が主人公になったことが、誰にも徹底しておりまして、自分達の税が国家のどんな事業に今年に使われるか、そしてその事業が国家の工業建設をどれだけ発展させるか、また工業建設は人民にどのような利益をもたらすかという具体的な統計を政府から一つ一つ出して説明しています。……中略……農村の子供達に政府や政府の工作員（むかしの官吏）についてどう考えるか聞いてみましょう。『政府は誰れの政府だ——人民の政府だ』『工作員は誰から月給を貰っているか——われわれ人民から月給を貰っている』『国家の富は誰のものだ——人民の政府だ』『工作員が人民のために服務しなければどうするか——われわれは工作員を罷免する』といった調子で、子供達の言葉にさえはつきりとした意識の変化が現われています。（『福地いま氏「私は中国の地主だった」——岩波新書一四一―四七頁）

（9）一九四八年一月二五日付東北日報社説「土地均分運動中の諸問題」の中で次の如く述べている。「貧農。雇農を土地均分運動から除外すれば貧農。雇農が経済上政治上解放され得たとしても、精神上ではなお徹底的に解放されたことにはならず、他人から蔑視されることになり、自分も頭を上げることができないであろうし、かくては貧農。雇農階級全体としての積極性を発揚しえないであろう。」（中華人民共和国の国家体制と基本動向一三六頁）

B・土地改革と新婚姻法

今日中国では、『土地改革と婚姻法とが失敗すれば革命は失敗だ』^①といわれている。土地解放と人間、とくに婦人の解放とは夫々解放問題として重大であるばかりでなく、何れか一つ失敗しても、他もまた失敗に帰せざるを得ない。それはひいては、新しい経済建設の望みを失うものであると云えよう。『中華人民共和国婚姻法』^②が、法律の中で何によりもさがけて『請負い・強迫・男尊女卑、子女の利益無視などの封建主義の婚姻制度は廃止する。男女婚姻の自由、一夫一婦、男女権利の平等、婦人および子女の合法的利益を保護する新民主主義の婚姻制度を實行する』（才一条）の総則の下に、制定施行せられた意味も、儒教主義、家父長制下の婚姻からの解放が、強く要求されてすべての婦人及び子女の、法主体性の原則と矛盾するものは排除すると云う、その先決的な重大さにかゝつていたからであ

る。

土地改革によつて旧い権力関係がくずされ、人民が自由と平等を得た社会では、婦人もそのような権力から解放され、自由と平等を獲得したわけである。^③婦人が『結婚は男女雙方とも本人の完全な自発的希望で』（第三条）結婚も就職もできるようになつたことは、婦人の性格の上にも革命的变化をもたらし、従前の『門当戸対』（家柄相当）の結婚から解放され、愛する人、尊敬する人を自由に選び、またそれが婚姻法によつて要請され^④新政府もそれを必ず実施するようであるから、婦人の気持が如何に複雑で、希望に満ちたかは想像に難くないのである。新婚姻法公布当時の状況を、福地女史は、『なにしろ農村では人民がまだ土地改革の学習さえ始めていないところへこの婚姻法ですから、童養娘は飛び上つて喜ぶ、その養父母は悲しんで政府を恨む。喜ぶ人はたいいてい若い人達で悲しむ人はたいいてい老人、または男の人です。このように新婚姻法をめぐつてみんな笑つたり泣いたりしました』と話されているが、婚姻法は人口の半数以上占める婦人を解放し、生甲斐ある人生を与えたのは確かである。

私はこのような新中国下の婦人——農民を含めてその意識変革を、土地改革との関連に於て理解するために、昭和十一年以来中国にあつて、日本人の女地主として解放後の珍らしい体験をされた。福地いま女史（明治大学法^{（明）}と東洋文化研究所（東大助教古島和雄^{（東）}）の間の応答を以下に引用して、その解明を試みよう。（引用文中^{（明）}及び^{（東）}は拙生の註釈と加筆である）

編者——土地改革が終つてから農民生活はどのように変つたでしょうか。

福地——まず地主ですが農民と均等の土地を分配されますと「よしこれから人生の再出発だ」と誓いながら、みな一緒に田畑に出て働き出しました。男は悪霸地主や反革命分子として処刑されたり、また労働改造隊などにとられた地主の家庭では女

達ばかり残されたのが少くありませんでした。この女達はかつては金・銀・宝石に飾られた白い手に農具を握つて大地と組み始めました。この様子を見た農民は自分の妻や娘に「お前達もこれから外に出て働くのが当然だ」といい出しました。四川省達県（福地氏は河出郷に居た）あたりではそれまでおよそ婦人が田畑に出て働く習慣はなかつたのです。そして解放後経済的に前よりも豊かになつた婦人はなかなか外に出て働くことはしませんでした。それでも昔の地主の家の婦人達のひたむきな労働振りを見ると、だん／＼考え直したものと見えまして、農民の娘も田畑に出て仕事をするようになりました。何といつても打倒された地主階級の婦人が一番大きい変化をしました。

編者——革命の前後で婦人の地位というものは相当大きく変つたことでしょう。

福地——解放後の婦人は、もう父母からも、まして他人からも干渉されることなく、一切の鎖を断ち切り自分の思うようにこの世の中を歩いて行こうとしています。社会の組織や政治がその独立を助け、政府がその手を引いてみちびいています。そして婦人自身あの大革命の中で自己改造を遂げました。みづから自分と自分の家庭を革命しました。中には朽ち果てた家庭を破壊して新しく再組織した人達もあります。地主の太太（奥さん）達はもう太太ではないと云つて勇敢に職場に飛び込みました。小姐（お嬢さん）達ももう小姐ではないといつて各機関に入りました。（資料註一）そして何と申ししても、婦人の経済的独立が得られたことは、婦人の地位に大きい変化をもたらした根元です。

編者——婦人の社会的進出は大した勢いですね。中には重要な地位に着いてゐる婦人もあるのでしょうか。

福地——中央政府の副主席の宋慶齡さんをはじめ、司法部長（司法大臣）の史良さんや、衛生部長（衛生大臣）の李德全さんなどがみな婦人だということでも十分おわかりだと思います。日本の婦人はもう一度謙虚な心で中国婦人を見直して頂きたいと思います。……中略……もう一つ婦人の地位を確保しているものは裁判所です。司法改革後の裁判官は婦人の地位擁護については徹底的に戦います。婦人を侮辱したり強姦したりしますとすぐ重い刑に処せられます。裁判官の先頭に立つて婦人の翻身を助けています。（資料註二）

編者——一夫多妻はどうなりましたか。

福地——階級制度の打倒とともに打倒されました。新婚姻法はこの法律発布以前の「一夫多妻」には干渉しないのです。（資料註三）財産制度と家族制度が破壊されました。一夫多妻だけが残るわけはありません。

右に紹介した談話からも知られるように、新婚姻は、仁井田博士も指摘される如く、農村の社会構造の基本単位で

ある家族制度の変革を、企図したものである。併し婚姻法の実施を可能ならしめたものとして、土地改革は逸することのできない前提条件である。また事実、土地改革の全過程に於て旧来の家族制度の変革——生産や労働の問題。薪、米、塩、油の購買などの家計の問題。子供を生む問題。病氣や衛生の問題ことに経済問題が解決される中で、新婚姻法の目途する。婚姻・離婚の自由、男女平等。一夫一婦。婦人及び子女の正当な権利の保護。童養媳の禁止などの、基本的問題が解決される過程がとられたのである。

こゝに農民は、婚姻の自由が経済的な裏付をもつてこそ、実現されることを身にしみて体験したのである。女性にとつて離婚権の基盤も客体的条件の変革化——それは土地改革などの諸変革を伴うものであると云え、婚姻。離婚の自由権は、単に客体的条件の変革によつてのみ可能ではない。そこに自由を支える精神の変革化——離婚しても独立して生活が出来るという意識、つまり経済的保障が婦人の自由権を左右するのである。

近代的よそおいの婚姻法は、中華民国政府もつくつた。勿論、中華人民共和国政府のそれとは、内容上も同視すべきではないが、政府がそれを社会に実現化しようとする意図に於て、両者の間には大きな隔たりがあつた。如何に理想的な法律がつくられても、その法律が社会の現実に関心な、浮木であつてはその実現化は、極めて難かしいことに留意すべきである。

【註】

(1) 福地氏談「法院声明（県・省各級の裁判機関―拙生加筆）はまた萬一この婚姻法が失敗するならば社会革命は失敗であるとも云つておりますから、この年からは（一九五三年）人民達の内部の敵―旧思想も拂いのけられて朗らかな風景になることは、あの政府のいままでのやり方から見てまちがいないことでしょう。」福地いま「私は中国の地主だつた。」（一六八頁）

(2) 一九五〇年四月一日、中央人民政府委員會第七次會議通過。同年五月一日政府委員會公布施行。

(3) ここで云う自由の概念は、われわれの考える意味とはおよそ違ふのであつて、人民憲法が保証している「言論の自由。自己發展の自由」(第三条)にしても人民の利益と世界の平和に役だつかぎりに於て自由なのである。

(4) 中華人民共和國婚姻法第三章第八條「夫婦は相互敬愛。相互援助。相互扶養。和睦團結。勞働生産。子女の養育にあたり、家庭の幸福および新社會建設のためにともに奮闘する義務がある」と規定している。

(5) 童養媳とは息子の嫁にする目的で幼女を買い、又は買受けて養育するもので、旧中国での家族労働の一員としての役割を占めた。新婚姻法第二條「蓄妾……童養媳は禁止する」とされている。

(資料註一)——農民の意識変化と言葉の変化は、例えば従前の太太。小姐。老爺。の言葉は封建制度打破の一環の下に廃され、又朝の「吃飯了麼」と云う挨拶は誰れでも安心して食生活できるために用いられない。正月の「恭喜發財」も云われない。魯迅の「阿長と山海經」の中で、彼の幼少時に母親から「阿媽恭喜・恭喜。」といわねばなりませんよ教えられたとあるが、解放後は若し「恭喜」と云えば思想が改造されてないという。又旧中国では面子を重んじたが現在は「打破面子」「脱褲子・打斷尾巴」と云われる。

(資料註二)新婚姻の徹底化運動に伴つて、裁判・結婚・離婚などの問題は、文学作品によつて啓蒙化された。それらの文学作品は恋愛と結婚・家族制度の問題。とくに婦人解放の問題が基本的な問題とされている。例えば趙樹理「小二黒の結婚」では農村の旧習慣の變革。婚姻と婦人の解放。婦人の経済的独立など巧みに批判しまた啓蒙している。

(資料註三)——一夫多妻制を禁止する法文はないが「重婚・蓄妾は禁止する」(第二條)「結婚は男女雙方とも本人の完全な自発的希望」(第三條)に基いて「男子は二〇歳・女子は一八歳」で結婚できると規定されているので、当然一夫多妻制は打破されるものと解釈したい。

(6) 中華人民共和國婚姻法第一七條「男女雙方とも離婚を自発的に希望する場合は離婚が許される」経済面に關して第二一條「離婚後女子側で扶養する子女は男子側で必要な生活費および教育費の全部あるいは一部を負担しなければならない」第二三條「離婚の際、女子側の婚姻前の財産は女子側の所有となる」同條「人民法院は家庭財産の具体的状況にもとづいて女子側と子女の利益および生産發展の原則に有利になるよう顧慮して判決する」と規され、因に中華人民共和國民法第五節離婚の一〇四九條「夫妻兩願離婚者得自行離婚」一〇五一條「兩願離婚後關於子女之監護由夫任之但另有約定者從其約定」とあり、新婚姻法同様に近代的法規の形を整えている。にも拘らず農村社會に滲透することなく旧慣が多く残されて

いたことは、法律が単なるスローガンであつてはならぬことを意味するのである。

三、結語——まとめと今後の問題

旧い中国社会に行われてきた婚姻慣習法を、新しい形式の婚姻法に対比するとき、三つの著しい特質を挙げることができる。(一)は旧中国社会の慣行は男女当人のためでなく、家のため、祖先のためのような超個人的性質をもつた、家と家との結合であつた。また家の将来のための婚姻によつて男子を得る必要があつたし、否、婦を迎えることそれ自身が農業家族にあつては、働き手を加えるものであつた。(二)は婚姻は家産その他に於て、対当の『門当戸対』の間に結ばれるものであつて、男女の意志によつては、婚姻は決定されなかつた。(三)に婚姻は親こそ婚姻締結の当事者であつて、男女ことに、女性に婚姻締結の客体とは云えても、当事者とはなり得なかつた。

旧い婚姻慣習が農村社会の機構深く滲透してきたことは、旧来の法規が法と云わんより、むしろ法の骸骨であつた場合を意味している。本文に論究した如く、中華民国諸法のように、立法者の手を離れて立法者の意志そのままに、社会に受け入れられていたとは限らないのである。

この意味に於て、旧農村社会の現実の規範たる慣行法を度外規して、皮相的な法規の解釈に専らすならば、それは骸骨的な制度史 *Gesetzesgeschichte* 又はドグマ的な無内容なものも描けても、十全の意味での法史 *Rechtsgeschichte* は、中国の場合特に描けないのである。斯る立場に注視しながら解放後の農村社会を見ると、フランス革命。ロシア革命の場合でも、革命事業の最初に婚姻法の本質的変革(宗教からの解放。婚姻の世俗化を目標)が行われたが、新中国も、儒教倫理

及び家父長制下の婚姻からの解放が強く要求され——家父長権はすでに過去のものとなり、青年、ことに女性は自分の愛する相手と婚姻する権利、職業選擇の權利などの、法主体性の原則が成立されつゝあるのである。

解放という言葉の正しい意味で、中国革命に於ける女性の解放は何人も認めるであらう。併しもとより新中国は、解放後に社会主義的人間を造り出そうとする過渡期にあり、恋愛。結婚。家庭の問題で、幾多の女性が悲喜劇を起しているかは、新聞の投書欄にも数多く見られ、又戦後の日本女性の歩みと照しても頷ける所である。真に美しい社会主義的女性が誕生するのは、人民中国が、この峻しく厳しい過渡期を斗い、勝ち抜いてからである。

(三一・八・二六・史学会会員)

佛教哲学における教育の原理 (続)

正 田 英 肇

(承前) 前号に於ては、日蓮聖人の所謂「主・師・親三徳」の指南に随つて、回・基・仏の世界三大宗教を判釈し、回教のアラーは「主徳」、基督教のエホバは「主父兩徳」を具すのに対して、仏教の如来は「主師親三徳」を具すが故に、回教のアラーが絶対主宰者であり、基督教のエホバが創造者であると共に「天なる父」であるのに対して、仏教の如来は更に「教主・本師」という師徳を具備し、いはゞ教育主体的性格をその特質としてゐるから、仏教の教理が他宗教に比して著しく教育的であり、随つてその哲学が多分に教育の原理を包蔵してゐる事を論述して来たが、本号に於て更に詳論せんとするに当り、前号に引續いて、就中、